

移住した人が いきいき暮らし 活躍する町

西会津町では、地域おこし協力隊を中心にさまざまな個性をもつ人が県内外から集い、この町ならではの暮らしを楽しみながら、地域の資源を生かした活動や事業を展開しています。ここでは、町のにぎわいを生み出している3名の移住者をご紹介します。

農村の暮らしから、 学びと挑戦をひらく宿。

震災を機に福島へUターンし、南相馬市で小中学生の人材育成に携わったのち、「福島を訪れるきっかけとなる宿をつくりたい」と考えるようになりました。その拠点として選んだのが西会津町です。人口が少ない、課題も多くある、それが私にとっては、「新しいチャレンジの余白がある」と感じたことが、移住の決め手となりました。移住後は観光担当の協力隊に着任し、空き家だった元桐下駄屋

株式会社くらしのひととき 取締役 佐々木祐子さん
福島県郡山市出身 2017年に移住



をセルフリノベーションして「ひととき」を開業。現在は(株)くらしのひとときとして、町や福島県を訪れる人の入口となることを目指し、企業の研修やプロボノ受け入れ、子供たちと「小商い」に挑戦する教育プログラムなどを展開しています。西会津の暮らしを通して、自分で課題を見つけ、小さな挑戦と失敗を重ねられる場と機会を育てていくことを大切にしています。



会津の自然や文化を 直にふれられるものづくり。



「自然豊かな場所で、鞆工房を立ち上げたい」。その拠点を探さずに出会ったのが西会津町でした。見渡す限りの山に囲まれ、ふるくから受け継がれてきた手仕事があり、縄文文化も今なお身近に感じられる。「この町でこんなことをしたい!」という意思をもつ若者が集まっていることも魅力でした。移住後は「起業型地域おこし協力隊」に着任し、空き家を改修して工房を開業。協力隊を終

やまあみ鞆製作所 鞆職人 片岡美菜さん
神奈川県出身 2020年に移住



えた今は店舗も運営しています。大切にしているのは、会津の自然や文化から立ち上がるものづくり。町の猟師さんと連携し、害獣として捕獲された動物の皮を利活用したり、出ヶ原和紙や会津木綿、からむし(苧麻)などの素材を取り入れたり。暮らしと自然の関わりの中で生まれた命や素材を、ただ消費するのではなく人の生活の中で生かす。そんな想いでものづくりに向き合っています。

地域の内と外、 ふるいと新しいを橋渡しする。

西会津町をとりまくアート活動や、土地に根付く暮らし。そうした魅力に惹かれ、移住を決めました。その後、「デジタル戦略推進担当」の協力隊に着任。活動する中で、「この町でなら、自分のやりたいことを形にできそう」という手応えを感じ、(株) LONGBRIDGE を創業しました。県内外から訪れる企業・教育機関の方たちの町内アテンドや、「石高プロジェクト」の推進。2025年には空き家をリノベ

ションした文化複合施設「叶や」にて、和紙作家であるパートナーと共に喫茶店「POSSIBLE COFFEE」を始めました。と言っても、単なるカフェをつくりたかったわけではありません。地域の内と外をゆるやかに橋渡しして、町の課題や可能性について語り合う。そんなやりとりが自然と生まれ、日本の田舎の未来と一緒につくる、新しい共同のハブのひとつになれたらと考えています。

株式会社 LONGBRIDGE 代表取締役
POSSIBLE COFFEE オーナー 長橋幸宏さん
東京都出身 2021年に移住



デジタルで描く 日本の田舎の未来

2021年にスタートした「西会津町デジタル戦略」。農業支援や歴史資源の再発見、そして行政の「しごとのDX」へと領域を広げながら、分野横断の取り組みを進めています。デジタル技術を活用し、持続可能な「日本の田舎」のモデルを描く挑戦が続いています。

石高プロジェクト



「お米を買う」という以外に、持続的に農家さんを支える仕組みがつかれないだろうか? そんな背景から誕生したのが「石高プロジェクト」です。参加者は、西会津町の田んぼで米づくりを手伝ったり、SNSで魅力を発信したりと、多様な形で米づくりに貢献。その活動がブロックチェーン技術を活用してトークンとして記録され、貢献度に合わせて「お米」が返礼されます。買い手とつくり手の新しい関係性を築く実験的な取り組みです。



デジタルよろず相談



町では、スマートフォンやタブレット端末の操作方法など、デジタル技術に関する幅広い相談を受け付ける「デジタルよろず相談」を行っています。地域おこし協力隊や専門員が対応し、来訪者の多くは高齢者です。機器の使い方にとどまらず、契約内容の見直しや携帯料金の不安など、日常生活に関わる小さな困りごとにも対応しています。制度や窓口相談するほどではないものの、暮らしの中で感じる不安や疑問に耳を傾けることで、町民の声を丁寧に拾い上げています。

古建築デジタルマップ

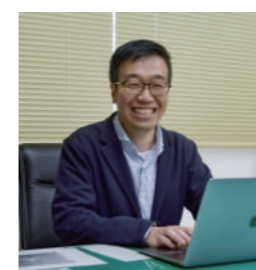


人口減少に伴い空き家が増加するなか、西会津町では歴史的価値をもつ古民家を「地域資源」として再発見し、その魅力を発信する「古建築デジタルマップ」を公開しました。本マップは、建築の専門家による現地調査をもとに、建物のスケッチや歴史的背景を掲載。写真では伝わりにくい構造美や温もりを丁寧に描き出し、建物にまつわる物語とともに紹介しています。さらにGPS機能と連動し、現在地を確認しながら町歩きが可能。古建築だけでなく、飲食店や宿泊施設も網羅しており、「観る・食べる・泊まる」を一体的に楽しめます。



最高デジタル責任者の声

AIで事務仕事を自動化し、持続可能な自治体モデルをつくる。



西会津町最高デジタル責任者 藤井靖史さん

西会津町は「日本の田舎、西会津町。」をブランドスローガンに掲げ、日本の田舎を代表する先進的な取り組みを進めています。その柱の一つが、AIを活用した「しごとのDX」です。これまで行政の業務は事務手続きが大半を占めていました。人口減少に伴い職員数も減っていく中で、この負担をどう軽減していくか。そこで進めているのが、役場業務の自動化です。資料作成の効率化にとどまらず、AIを活用して仕事の仕組みそのものを見直しています。生まれた時間を、本来向き合うべき仕事へ。行政の役割は、住民の声を「翻訳」することです。高齢者と若者、それぞれの意見を受け取り、合意形成へとつなげる。そのために必要なのは、発信力よりも受信力です。「デジタルよろず相談」も、その実践の一つ。暮らしの困りごとに耳を傾ける中で、町の細やかな課題が見えてきます。DXで生まれた時間を、住民と向き合い、声を翻訳し、合意形成へとつなげていく。その積み重ねが、人が減っていく時代においても持続できる「日本の田舎」のモデルになると考えています。